W450×H450

赤痢、窒扶斯（チフス）、百斯篤（ペスト）

赤　痢

「赤痢（せきり）」は一般には細菌性赤痢を指し、平安時代から知られていました。別名をしぶり腹、疫痢（えきり）と呼び、血や膿（うみ）が混じった便が出るため、「ちくそ」とも呼ばれました。

排泄物に汚染された水や食料、手などから感染するため、江戸時代には飢饉や災害時など衛生環境が悪くなるとしばしば流行しました。

窒扶斯

日本で恐れられたのは「腸チフス」で、チフス菌の感染により、腹痛や頭痛に続いて高熱が長く続き、意識障害を起こすこともあります。中国では「傷寒（しょうかん）」と呼ばれ、戦乱や飢饉の際にかかりやすいといわれていました。日本では江戸時代以降に流行しました。

百斯篤

ペスト菌の感染により引き起こされ、菌が血液中に入ると敗血症となり皮膚に大きな黒い斑点ができるため、「黒死病」とも呼ばれました。ペスト菌に感染したノミやクマネズミに噛まれると腺ペストとなり、それが肺に入ると肺ペストとなって3日以内で死ぬと恐れられました。日本では船の貨物に紛れたネズミ類により、明治～大正時代に流行しました。